談話室

アフリカの食糧問題と緑提灯

1960年代からアジアでは小麦，稲を中心に「緑の革命」が成功し，生産力は著しく上がった。一方，アフリカでは「緑の革命」は起きなかった。アフリカの穀物生産量は，1961年は0.46億トンで，2006年は1.46億トンに増えたが，この間に人口は2.2億人から9.4億人に増え，1人当たりの生産量は207kgから155kgに下がってしまった。単収については，アジアでは1961年の1.16トン/haから2006年の3.36トン/haに増えたが，アフリカでは0.81トン/haから1.14トン/haに増えたに過ぎない。

「緑の革命」は20世紀に急速に発達した農業技術を発展途上国に持ち込んだものである。20世紀に急速に発達した農業技術とは，1865年のメンデルの遺伝法則に基づく育種技術，1908年にドイツのハーバーが発明した窒素肥料の合成法，1938年のDDTに始まる化学農薬，1902年の蒸気トラクターに象徴される機械化などである。これらの技術は先進国では第二次大戦後急速に普及し農業生産力を高めた。

一方，アフリカでは国連機関，先進各国，中国・台湾が技術援助を試みたが，稲，小麦の栽培が限られていたこと，ヤムなどの根菜類の育種が遅れたこと，農村・農民の新技術の受容力不足，不安定の政情，等々の理由で「緑の革命」は実現しなかった。

今年５月末に横浜で行われたTICAD Ⅳ(第４回アフリカ支援会議)でも，アフリカにおける食糧問題がメインテーマのひとつになった。世界の人口増加，穀物を使ったバイオマスエネルギー生産，食料への投機などで食料価格が高騰している。その影響が最も深刻に現れるのがアフリカであることは間違いあるまい。その影響は世界中に波及するだろう。日本もすでに影響を受けている。

アジアの人々が，およそ一万年前に，アジアの野生イネ(オリザ・ルフィポゴン)から稲を栽培化したように，降水に恵まれた西アフリカでも，およそ三千年前に野生イネ(オリザ・バルティ)からグラベリマ稲という栽培稲ができた。従っ

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

て，西アフリカは伝統的に稲作国でもあった。

筆者は昨年よりWARDA(アフリカ稲センター，本部ベナン国コトヌー)の理事を勤めている。WARDAは西アフリカ諸国が稲作振興のために1970年に設立した研究所で，日本は設立当初から支援を行っている。現在，日本人の研究者が６人滞在していて，これは約50人の研究者の中で，国別では最も多い。WARDAの最近の成果ではネリカ米の開発が出色している。NERICA(New Rice for Africa)は耐干性や耐病虫に優れるが収量の低いグラベリマ稲と収量の高いアジアの改良種を交配して得られた品種群で，西アフリカのみならず，東アフリカ，中央アフリカにも普及しつつある。FAOも「昨年のアフリカでの米増産はネリカ米の普及による」と絶賛している。筆者もWARDAの次なる技術開発に貢献したいと考えている。

ところで，読者の皆様がご周知の通り，日本の食料自給率は40%を切ってしまった。アフリカの食糧不足も他山の石ではないのである。筆者は，仕事の傍ら，「緑提灯運動」なるものを行っている。読者の方々にもどこかで見聞きしたことがあるかもしれない。これは，カロリーベースで地場産品・国産品を50%以上提供している飲食店の店頭に赤提灯ならぬ緑提灯を架けていただく運動である。2005年４月に小樽で一号店が出来て以来，賛同する友人達と細々と活動をしてきたが，今年１月末の中国ギョーザ事件以後，多くのメディアにとりあげていただき，店舗数が増え続け，本稿を書いている７月15日現在約1,250店が参加している。全国の飲食店が約50万店と言われているので，自給率向上には微々たるものであるが，緑提灯の居酒屋から「常連客達が日本の食料自給について論議している」といった報告を聞くと嬉しくなる。読者の皆様の１人でも多くが，出勤の際に「今晩は，日本の食料自給率向上のために頑張ってくる」と奥様に言い渡し，緑提灯の店ののれんをくぐっていただければ幸いである。

(農業・食品産業技術総合研究機構理事 中央農業総合研究センター所長

丸山清明・まるやまきよあき**)**

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。